



TITLE:

預金通貨の貨幣的性質に就て

AUTHOR(S):

中谷, 實

CITATION:

中谷, 實. 預金通貨の貨幣的性質に就て. 經濟論叢 1933, 36(1): 130-147

ISSUE DATE:

1933-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130270>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第一號

第三十六卷

昭和八年一月一日發行

新年特別號

インフレーション財政策	法學博士 神戸 正雄
人口に關する小論	文學博士 高田 保馬
社會的に妥當なる農業經營規模に關するベルンハルデイの見解	經濟學士 八木芳之助
操短と生産費	經濟學士 大塚 一朗
資本論と一般均衡論	經濟學士 柴田 敬
中央銀行役割の發展に就いて	經濟學士 松岡 孝兒
預金通貨の貨幣的性質に就て	經濟學士 中谷 實
ケトレー直後の英佛統計學	法學博士 財部 靜治
土佐の育子策について	經濟學博士 本庄榮治郎
爲替心理説の批判	經濟學博士 谷口 吉彦
宇和島藩の蠟專賣	經濟學士 堀江 保藏
琉球農村共同體 <small>と我國民理想としての</small> 『國民共同體』	經濟學博士 石川 興二
地方財政の改革	經濟學博士 汐見 三郎
漁業組合論	經濟學士 蟠川 虎三
二ツのインフレーション	經濟學博士 小島昌太郎
新着外國經濟雜誌主要論題	

（禁轉載）

預金通貨の貨幣的性質に就て

中 谷 實

一 序 言

現時の經濟社會に於ける交換取引は、鑄貨紙幣銀行券等の所謂現金に依る事少く、其の大部分は、小切手手形振替等の決済方法に依存するが故に、斯かる小切手又は之が振出の基礎となる銀行預金(或は郵便預金組合預金等をも含めて)に對して、預金通貨 Deposit currency (money)¹⁾ 銀行貨幣 Bank money²⁾ 振替貨幣 Giralseld³⁾ 等の名稱が與へられる。

預金通貨の思想は米國に於て發生し、ダンバーによりて初めて貨幣と稱せられたと言はれるが⁴⁾、之が果して貨幣なりや否やは尙未だ意見の一致を見ざる所である。

抑もあるものが貨幣なりや否やを見る爲には、先づ貨幣の本質を求めて、その本質に照し看て其の何れなるかを決す可きである。然し乍ら、嚴密なる意味に於ける素材主義の立場を採らざる限り⁵⁾、貨幣の本質は其の職能によりてのみ求め得らるるが故に、此の場合に於ても、其のものが貨幣たるに充分なる職能を行ふや否やを検すれば足るのである。従つて預金通貨に於ても、之が貨

- 1) I. Fisher; The Purchasing Power of Money, p. 33
- 2) J. M. Keynes; A Treatise on Money vol. I. p. 5 p. 23.
- 3) F. Bendixen; Das Wesen des Geldes. 4. Auf. S. 9.
- 4) 牧野博士：貨幣學の實證的研究 114頁
- 5) 嚴密なる意味に於ける素材主義が今日一顧の價值なきは明かである。

幣たるに充分なる職能を行ふが故に貨幣なりとする説、及び之が其の職能を行ひ得ざるが故に貨幣にあらずとする説のみが問題とせらる可きである。

他方、物の本質又は本質的職能を求むる場合には、現實の社會に於てそのものと認めらる所の總ての事象より、之らに共通にして他のものには見られざる所の特質又は特殊の職能が擧げられるのである。故に其の前提として探らるる事象にして、内容範圍に差異ある時は、之より得られたる本質又は本質的職能に於ても、亦多少の相違あるを免れない。貨幣に付ても同じ事が言ひ得られるのであつて、或事象を貨幣現象に含めて打立てられたる本質論又は職能論より見れば、其の事象は當然貨幣の中に入れらる可く、此の事象を除外して打立てられたる本質論又は職能論より見れば、之は當然貨幣以外のものとなる。

故に本稿に於ても、先づ貨幣の本質又は貨幣たるためには不可缺の職能を求め、之より見て預金通貨が貨幣なりや否やを論ずるの方法を探らずして、預金通貨に貨幣たる事を認むる諸説と之を否定する諸説とを對比し、以て夫等の論據の優劣を吟味する事とする。

二 預金貨幣肯定説

凡そ相反する二つの説を比較吟味せんが爲には、兩説の主張が相等しき前提より出發するを必要とする。而して、預金通貨が貨幣なりや否やを檢する今の場合には、此の相等しき前提が貨幣

の職能に於て求められねばならない。

貨幣の職能としては種々のものが擧げられるが、それらの中、貨幣たるが爲には必ず營まる可き所の本質的諸職能としては、ワグナーの擧ぐる、(一)一般的交換手段 Allgemeines Tauschmittel

(二)一般的、特に合法的支拂手段 Allgemeines, insbesondere gesetzliches Zahlungsmittel (三)一般的價值測度(價格測度) Allgemeines Wert- und Preismass が一般に認められてゐる。即ち此の三つの

職能を營み得るものならば總て貨幣と認められるのであつて、此の點に關しては、預金通貨を貨幣とする所の諸説に於ても之を貨幣にあらずとする諸説に於ても、全く相一致してゐるのである。⁶⁾

斯くて、預金通貨が貨幣たる事を主張せんが爲には、それが右の三職能を營み得る事を立證するか、或はそれらの職能中あるものを營み得ざる場合には、その營み得ざる職能が貨幣の本質的職能に非ざる事を立證せねばならぬのである。

預金通貨に貨幣たる事を認むる諸説は、すべて、記號說 Zeichentheorie 指圖權說 Anweisungstheorie 又は票券說 Chartatheorie 等の名を以て呼ばるる所の具象的非商品說、或は貨幣抽象學說と呼ばるるものの中に見出される。¹⁰⁾ 故に以下右の三職能に就て、之らの諸説が預金通貨を如何に取扱ふかを覗はう。

(一)一般的交換手段 先づ預金貨幣肯定説は之を以て貨幣の本質的職能と認め、預金通貨が此の職能を營み得るが故に貨幣なりと主張するのである。

6) K. Helfferich; Das Geld, 1923 S. 283, Wagemann; Allgemeine Geldlehre I. 1923 S. 100. 高垣博士; 貨幣の職能71—100頁。同、貨幣の本質40—41頁、橋爪教授; 貨幣論72—84頁參照。

7) A. Wagner; Sozialökonomische Theorie des Geldes, 1909 SS. 119—121.

8) A. Sommer; Das Geld und die Erscheinungsformen der Wertseinheit (Jahrbücher f. Nationalö. u. Stat. III Folge 75 Bd.) s. 32

儲、一般的交換手段の意義を視ふに、或は間接交換の一般的媒介手段となし、¹¹⁾或は一般的購買手段即ち他財獲得手段の意味に用ひられる。¹²⁾然し乍ら、貨幣は其の性質上、財との唯一回の交換によりてその用を了ふるものではなく、轉々流通し行くものなるが故に、右の二つの解釋は決して相矛盾するものではない。¹³⁾

要するに、それが何れの意味に用ひられるにせよ、一般的交換手段たる限り、何日如何なる場所にて、又何人によりても受領せらるるを要し、更に容易に他人に譲渡せられねばならぬ。即ち一般的受領性と譲渡性とは一般的交換手段たる爲の必須的要件となる。¹⁴⁾

然らば預金通貨は如何にして右に述べたる如き一般的交換手段たり得るか

先づ具象的非商品說中より其の主張を視はう。即ち票券說の代表者たる橋爪教授に従へば、「貨幣とは、社會生産物一般に對する參加票券たる特質、或は交換價値の表象化客觀化たる性質を有し、交換媒介要具として作用するものにして、……其の價値の表象化は銀行帳簿への記入によつてもよいのである。故に支拂の爲に隨時小切手を振出し得る銀行當座預金即ち預金貨幣も亦、今日では一種の貨幣に他ならぬ。」¹⁵⁾のである。蓋し「日常の小額支拂、及び銀行と取引關係なき人々に對する支拂に於ては、斯かる預金貨幣は一般的受領性を缺くと雖も、銀行と取引關係ある人々の間に於ける支拂、殊に大額の支拂に際しては、鑄貨銀行券にも増して好んで授受されるのである。而も、貨幣の諸形態の間には其の使用上の分業が行はるる事實と、重要諸國に於ける支拂の

9) S. Budge; Lehre vom Geld I 1. 1931 SS. 1-33 參照。

10) 橋爪教授; 前掲書 26-64頁。

11) Budge; a. a. O. SS. 1-6; 橋爪教授; 同上84頁、高垣博士; 貨幣の職能 74-77頁。

12) 高田博士; 經濟學新講、第三卷 72-73頁。

13) 更に之を社會的の觀念より、一般的參與手段と云ふも亦同じの意味をもつ(高田博士; 前掲書74頁) 14) 高田博士; 前掲書 74頁。

大部分が此の預金貨幣によりてなされ居る事實とを見るも、其の一般的交換手段たり得るは明かなのである。¹⁶⁾」

又高田博士に従へば、貨幣の本質的職能は、移動財流に對する移動的參與手段たる事であり、此の參與能力の所在を證據立てる移動的指標こそ即ち貨幣に外ならぬのである。¹⁸⁾ 然るに今日の社會に於ては、銀行當座預金即ち預金通貨も亦斯かる參與能力の所在を示す所の指標なりと見らるるが故に、之又貨幣なりと言はねばならない。而も、移動財流に對する移動的參與手段とは、一般的交換手段と、同一の本質をば異れる所に重點を置いて把握したるものであり、更に、銀行當座預金は小切手によりて（或は之すら要せずして）容易に移動せしめらるるのみならず。²¹⁾ 受領の一般性をも有するが故に、正に一般的交換手段たる職能を營み得るのである。²²⁾

最後にベンディクセンに従へば、貨幣は交換道具でもなければ尙更交換財ではない。それは共同體の爲になしたる給付の象徴であり、前行給付に基いて反對給付を受ける權利である。²³⁾ 而もその權利は共同體內の何人に對しても行はれるものにして、振替預金の如きも、經濟上貨幣と同一の作用をなすが故に、貨幣即ち振替貨幣である。²⁴⁾ 即ち振替貨幣は一般的交換手段たり得るが故に貨幣なりとの主張である。

次に貨幣抽象學說には如何なる主張があるか。ベンディクセンは前述の如く、貨幣を以て共同體に對する反對給付請求權となすが故に一種の票券說又は記號說とも見られるが、斯かる權利の

15) 橋爪教授；前掲書 33頁。

16) 同上；189-190頁、194頁。

17) 高田博士；前掲書41-55頁

18) 同上；48頁

19) 同上；171-176頁

20) 同上；73頁

21) 同上；141頁、168頁、173-175頁

22) 同上；76-77頁、171頁參照

23) F. Bendixen; Geld und Kapital 2 Aufl. 1920 Vorwort zur zweiten Auflage

24) F. Bendixen; Das Wesen des Geldes, S. 13 S.18 (大藏省理財局譯、貨幣の本質)

象徵たる記號を以て象抽的なる價值單位となすが故に、²⁵⁾實は貨幣抽象學說にも入れらる可きである。

又更に徹底したる抽象學說はリーフマンに於て見らる可く、彼によれば、貨幣の本質は抽象的なる一の觀念即ち一般的なる計算單位である。²⁶⁾蓋し、交換經濟に於ける貨幣の根本的職能は一般的交換手段たる事であるが、²⁷⁾而も現時の交換取引は、その大部分が所謂具體的貨幣を使用する事なくして、單に差引勘定せられ、相殺せられ、清算せられてゐるに過ぎない。²⁸⁾即ち斯かる私的の決濟方法は、抽象的計算單位として一般的交換手段となり、從つて貨幣となるのである。²⁹⁾故に彼によれば、小切手も亦一般的交換手段たる職能を營むものにして、貨幣たり得るのである。

以上の如く、預金通貨を以て貨幣なりとする諸説は、何れもそが一般的交換手段たる職能を營み得るが故に貨幣なりとするものであつて、更に何れも皆、現時の交換取引に於ける預金通貨の大なる勢力に着目したる點に於て共通するのである。而も、凡そ如何なる貨幣學說にありても、普通は、其の時代の經濟生活に現はるる所の貨幣現象の觀察によりて得たる直觀を基礎とするものなるが故に、³⁰⁾其の限りに於ては正に異議を唱ふる餘地がない。

斯くて、貨幣を以て一の票券と解し、或は一の記號又は指標と解する場合には、其の一般的交換手段たる職能と何ら抵觸するものではないが、若し之をリーフマンに於けるが如くに一の抽象的觀念とするならば、斯かる抽象的觀念は如何にして一般的交換手段たり得るか。概念自體は決

17-18頁、23頁)

25) a. a. O. 18, (同上大藏省譯、23-24頁參照)

26) R. Liefmann; Grundsätze der Volkswirtschaftslehre II Bd. 1922 S. 96 S. 105.

27) a. a. O. S. 98 28) a. a. O. S. 101. 29) a. a. O. SS. 105-6

30) 高垣博士; 本質論 129頁

して他人に譲渡し得るものにあらす、ましてや一般的受領性をば認め得べきものでない。故に現時に於ける交換取引の特徴に着目したる其の意圖は諒とすべきも、進みて貨幣の本質をば抽象的な觀念とする限り、斯かる主張は全く存立の基礎を覆されるのである。

(二) 一般的、特に合法的支拂手段 以上の如く、預金通貨貨幣説は、總てそれが一般的交換手段たる事を主張するのであるが、支拂手段たる職能に於ては、總てそれが貨幣の本質的職能に非ずとして之を拒否するのである。³¹⁾ 然らば何故に支拂手段は貨幣の根本的職能に非ざるか。先づ一般的支拂手段に付て見るに、それは次の如き二様の理由より拒否される。即ち、一方に於ては、經濟的意味に於ける支拂とは、何らか有效なる需要に應じて貨幣を譲渡する事にして、³²⁾ 普通には斯くす可き負擔の存在を前提する。³³⁾ 然るに贈與又は寄附行為に於ては、かかる有效なる需要従つて負擔の前提なく、爲に支拂手段たる事は此の場合に於ける貨幣の職能を説明し得ないのである。又他方に於ては、販賣購買の二段階を以て統一なる交換現象とする立場より見て、支拂手段とは全過程の片面的觀察より生じたる皮相の見解なりとせられるのである。³⁴⁾

次に合法的支拂手段たる職能に就ては、すべて貨幣の經濟的理論に於ては、斯かる職能が全然不必要にして而も無意義なるもの、として拒否せられる。³⁵⁾

右の如く支拂手段たる職能は、經濟的の意味に於ても亦法律的の意味に於ても、全く貨幣の根本的職能に非ずとせられ得るが故に、預金通貨貨幣説が此の職能を無視したるは又當然の事である。

31) 例へば Liefmann の如きは Zahlungsmittel なる言葉を用ふれど、一般的交換手段から獨立したる貨幣の根本的職能として用ひてゐるのでは決してない。
(a. a. O. S. 96 SS. 102-106)

32) 高田博士；前掲書55頁 33) 高垣博士；貨幣の職能、82頁

34) 例へば橋爪教授；前掲書 77-8頁

35) 橋爪教授；同上、78頁 Bendixen；a. a. O. S. 18 (譯本、24頁)

(三) 一般的價值(價格)測度³⁶⁾ 先づ、商品說に於けるが如く貨幣自體に素材價值ある事を以てその要件とするか、又は主觀的價值論者の如くに價值を主觀價值に限る時には、貨幣に此の職能を認め得ざるは論なき所である。³⁷⁾ 従つて茲に問題となり得るのは、貨幣そのものには素材價值無くとも、或はそれが名目的價值單位として、或は交換手段たる職能より來る所の機能價值によりて、價值測度たる職能が行はれ得るやの點のみである。³⁸⁾

然らば斯かる意味に於ける價值測度たる職能が、果して預金通貨に認めらるるや否や、又認められずとすればそれは貨幣の本質的職能に非ざるか。以下順次に其の所說を覗はう。

先づ預金通貨に此の職能を認むるものとしては、ベンディクセンが擧げられる。彼によれば、「個人主義的均衡の原則に基いて、總ての人が總ての人の爲に働くと云ふ此の社會組織には二つの前程がある。第一には、全體から認められたる價值の單位を用ひて、價值を測る事が可能なる事……近世の振替貨幣は實に之等の前提の役目をするのである。」³⁹⁾

次に、純粹なる意味に於ては此の職能を認めざれど、價值單位又は價值表示手段たる職能を認むるものとして、リーフマン⁴⁰⁾及び高田博士の說が擧げられる。然し乍ら前者は茲に述ぶだけの價值なき故、専ら高田博士に従ふ事とする。⁴²⁾

即ち博士によれば、貨幣は價值單位又は價值表示手段たり得るものなれ共決して價值測度たり得るものでない。⁴¹⁾ 又その價值表示手段たる事も、決して貨幣の根本的職能には非ずして、一般的

36) 茲に云ふ價格測度とは、價值測度と同じ意味に用ひられるが故に價值測度のみに就て述ぶ事とする。

37) 橋爪教授；前掲書 79-80頁 高田博士；前掲書、24-26頁、28頁 40頁

38) 高田博士；28頁、36-7頁、57頁 39) Bendixen ; a.a. O. S. 18 (大藏省譯 23頁)

40) 一般に價值測度と價值表示手段とが同列に置かるゝ故に此處に之を關説す

交換手段たる職能より必然的に生ずる所の云はば附隨的職能たるに過ぎないのである。⁴⁵⁾蓋し、貨幣が價值測定たるが爲には、測定たる貨幣單位は商品の價值より獨立したる一定の大きさの價值を保持たねばならぬ。然るに貨幣（單位）の價值は、取引せらるる交換價值の總量と、仲介者たる貨幣數量との釣合から定まるものにして、決して一定の大きさを有せず、從つて眞の價值測定たり得ないのである。⁴⁶⁾故に、預金通貨も一般的交換手段たり得る限りは貨幣にして、價值測定たるを要せぬのである。

最後に、預金通貨が貨幣たる爲には、如何なる意味に於ても價值測定たることを要せぬとせられるのは橋爪教授である。⁴⁷⁾即ち教授によれば、價值測定の正しき意味は商品說に於て主張さるるが如きものたるのみならず、貨幣數量の單位と貨幣とは全然別個のものなるが故に、⁴⁹⁾假令貨幣の單位には價值表示手段たる職能を認むとも、貨幣其のものは決して價值の測定たり得ず、又價值表示手段ともなり得ざるものである。

以上の如く、預金通貨に貨幣たる事を認むる諸説は、殆んど總て價值測定たる職能を否定し、之を以て貨幣の營む可き眞の職能にあらずとするのである。只獨りベンディクセンのみは、振替貨幣に價值測定能力を認むるものなれど、如何にしてそれが可能なるかを明かにせず、寧ろ價值の表示と云ふ可き所ならんと思はれるのである。

尙、價值測定の意味を以て所謂商品說の説くが如きものに限らる可きか、或は價值單位又は價

る（高垣博士；貨幣の職能88頁）

41) Liefmann; a. a. O. SS. 96-7

42) 本稿、6-7頁

43) 高田博士；前掲書38頁

44) 同上；38-9頁

45) 同上；33頁、62頁、66頁

46) 同上；38頁、尙價值單位たる職能が、一般的交換手段たる職能より必然的に派生する附隨的職能たる事に付ては後に述ぶるが故に此處では省略する。

47) 橋爪教授；前掲書、190-191頁

48) 同上；80頁

49) 同上；83頁

値表示手段たる事をも價值測度の中に含ましむ可きか、更には又貨幣と貨幣單位とを別個のものと見る可きや否や等、種々なる問題が存するであらう。然しながら、苟くも預金通貨が貨幣たる爲の要件としては、嚴密なる意味に於ける價值測度たる職能は全然不必要なものと思はれるのである。

註、尙、價值測度又は價值表示手段たる職能に關する、高田博士、橋爪教授の主張に對しては、最近佐原教授によりて詳細に論評されて居るが、紙面の都合とも一つには、後にブドゲの説を述ぶるに當りて關説するが故に、茲では其の批評を省略する。

三 預金貨幣否定説

前節に於て私は、諸種の預金通貨貨幣説を覗ひ、それらの中には正に之を認む可き理のある所以を明かにした。故に本節に於ては、苟しくも預金通貨を貨幣と認めざる諸説、又は少くとも之を躊躇する諸説に聽き、以て、預金通貨が貨幣の本質的職能を行ひ得ざるか、或はその行ひ得ざる所のものが果して貨幣の本質的職能なりや否やを、再び検討する事とする。

(一) 價值測度⁵¹⁾純粹なる金屬主義の立場が今日問題となり得ざるは勿論なれど、其の缺陷を認めて貨幣の本質を其の職能中に見んとしつつ、尙金屬主義を完全に脱し得ざる人々がある。⁵²⁾而も彼等は價值測度を以て貨幣の本質的職能に加へ、預金通貨は之を營み得ざるが故に貨幣に非すと主張するものにして、⁵³⁾其の勢力今日尙之を無視し得ざるものがある。故に、以下暫らく最近の主張たる

50) 佐原貴氏；貨幣の價值測定職能（研究論集第五卷第二號35-68頁）参照
51) 預金貨幣否定説に於ては、金屬主義の流を汲みて、その價值測度たり得ざる點を主張するもの最も強く、而も最近に至る迄は貨幣理論上重要な地位を占むる人々によりて信奉せられたる所なれば（高垣博士；貨幣の本質²⁶頁）本節に於ては先づ價值測度より始むる事とする。
52) 例へば前掲の Wagner, Budge 等

ブドゲの説のみを吟味しやう。

即ち彼によれば貨幣の本質的職能は、一般的交換手段と價值測定とにして、貴金屬鑄貨（金本位制の下に於ては金貨）及び制限されたる不換紙幣は此の兩職能を營み得るが、帳簿上の請求權（預金通貨）は價值測定たる職能を營み得ない。故に前者は貨幣なれ共後者は貨幣ではない。

然らば先づ、貨幣に價值測定たる職能ありや、又ありとすれば之は一般的交換手段たる職能と如何なる關係に立つか。

彼は先づ貨物貨幣に就て次の如く言ふ。即ち、一般に貨幣は價值（價格）表現手段なりと言はれるが、それは價值測定たる職能より附隨的に生ずる結果たるに過ぎない。即ち各財の交換價值關係は豫め定まりて、貨幣は只其の單位を以て之を表現するものなりと言はれるが、その所謂各財の交換價值關係は如何にして定められるか。自分によれば、先づ次の如き方法によりてのみ初めて各財の交換價值關係が知られるのである。即ち、市場に於て一般的交換手段たる財を m とすれば、 m とその他の財貨例へば a, b, c 等とは常に容易に交換され得るが、 a と b 、 b と c 等の直接交換は容易に行はれ難い。そこで容易に行はれ得る所の m と a 、 m と b を交換せしめ、それらの交換關係が $a = 2m, b = 4m$ ならば $a = 2b$ 、即ち a と b との交換價值關係が二對一なる事を知るのである。斯かる過程を経てのみ各財の價值即ち價格は統一的に表現せられるのであつて、右の如き各財の交換價值關係を發見する過程をば價值の測定と云ふ。而も最も重要な事は、かかる價值の測定

53) 例へば A. Wagner; a. a. O. S. 134. S. Budge; a. a. O. SS. 1-33

54) Budge; a. a. O. S. 10 55) a. a. O. S. 11. S. 31. SS. 32-3

56) a. a. O. S. 33. S. 38 57) a. a. O. S. 8. S. 19.

58) 高田博士; 前掲書、37頁 59) Budge; a. a. O. S. 8.

60) a. a. O. SS. 2-3 S. 6.

が絶えず新らしく行はれてゐるのである。⁶¹⁾

右の如く、貨幣の價值測定なる職能は甚だ重要なものなれ共、而も之を以て金屬主義者の云ふ如くに、一般的交換手段たる職能よりも一層根本的なものとは考へない。⁶²⁾ 又、兩職能は全然性質を異にするものなれ共、あるものをして一般的交換手段たるに適せしめる所の技術的特性は、價值測定たる爲にも亦非常に望ましきものなるが故に、一旦ある物が一般的交換手段となる時には、之が同時に價值測定として用ひらるる場合が多いと云ふに過ぎない。⁶⁴⁾ 而も兩職能は別個のものにて行はるる事もある故、⁶⁵⁾ 兩者は全然別個の職能たり得るのである。

右の説明は全然金屬主義の立場にして、その限りに於ては批評の價值なく、只彼が右の理論をば如何にして不換紙幣に迄及ぼしたるかの點に問題がある。

即ち彼は、順序として先づ鑄貨に於て價值測定たる職能が如何に表はれるかを述べ、更に之を推し進めて不換紙幣に迄及んでゐるのである。彼に依れば、貨幣たる貴金屬が一旦鑄造されて一定量の鑄貨のみが市場に現はるる事となれば、鑄貨のみが一般的交換手段となり、財貨相互間の交換價值關係は、最早や前述の如くにそれらの貴金屬に對する交換比によりて測られるのではなく、それらの鑄貨に對する交換比によりて測られるのである。⁶⁸⁾ 而も鑄貨の交換價值は、最初はそれに含まるる所の素材の價值と等しきも、後には費用を節するが爲に素材の價值が減ぜられて、それよりも大なる交換價值を有するに至る。⁶⁷⁾ 斯くて貨幣鑄造と云ふ事實によりて、貨幣は質的なものよ

61) a. a. O. SS. 7-8.

62) a. a. O. S. 12

63) 分割性 (Teilbarkeit innerhalb möglichst weiter Grenzen) と均質性 (annäherende Qualitätsgleichheit) a. a. O. S. 9.

64) a. a. O. SS. 9-10

66) a. a. O. 31-2

65) a. a. O. S. 9. 尙高田博士；前掲書62頁參照

67) a. a. O. S. 31.

り量的のものに變るのであるが、それは、供給される鑄貨の數量が制限されてゐる事と、鑄貨が代替性を有するに依るのである。⁽⁶⁹⁾

以上の如くにして、制限されたる鑄貨のみが一般的交換手段として用ひらるるに至れば、更に經濟法則の命する所に従ひて、出來得る限り素材に費用を要せざるものが貨幣として用ひらるるに至る。而もその貨幣材料たるや、前述の如き分割性と代替性を有する事が必要なるも、紙は斯かる性質をば貴金屬以上に持つてゐるのである。⁽⁷⁰⁾ 斯くて制限されたる紙幣も亦、制限されたる鑄貨の場合と同じく、材料價值とは無關係に一定の獨自の價值を持つ事となり、それは一般的交換手段たると同時に價值測度となりて、眞の貨幣と云ふを得るのである。

以上の如くブドゲは、全然金屬主義的な考へ方より紙幣に迄價值測度たる職能を認めるのであるが、其處には多くの問題がある。例へば、紙幣が一旦一定の高さの交換價值を得たならば、それが不換紙幣の場合であつても常にその價值は一定してゐる可きであらうか。假令紙幣の總額が制限されてゐても、之と交換せられる財貨の總量は決して常に一定の額ではない。寧ろ紙幣の價值は財貨總量の價值によつて決定せられるものにして、例へば紙幣の總額を一千單位とすれば、その一單位の交換價值は之と交換せられる財貨の總交換價值の一千分の一と云ふ可きである。⁽⁷²⁾

今若し之が許さるるならば、紙幣は價值測度たり得ない事となるのである。蓋し、ブドゲに依れば各財の交換價值關係が定まる爲には、前述の如き方法による價值測定が絶えず繰返して行は

68) a. a. O. S. 32.

69) a. a. O.

70) a. a. O. SS. 32-3 71) a. a. O. SS. 24-5

72) E. Carrell; "Budge's Lehre vom Geld" (Jahrb. f. Nationalö. u. Stat. III Folge, 81 Bd.) SS. 611-2 參照

れ居る可きである。⁷³⁾然るに、a 財と b 財との交換價值關係を知るには、a b 二財の各交換價值が、例へば財貨總量の交換價值の千分の一の何倍に當るかと言ふ事を知りて後でなければ、之を判定し得ざるものであらうか。成る程 a b 二財の直接交換は容易に起り得ないであらうが、例へば a と c、c と a 等の如き交換價值關係は比較的容易に知り得る事がある。然るに、a 財の交換價值が財貨總量の交換價值の例へば千分の一に比較せられて、その何倍に當るかと言ふ様な事が、前者程容易に判定し得られるであらうか。寧ろ各財相互の交換價值關係が豫め定まつてゐて、紙幣はその單位によつて之を統一的に表現するものと見らる可きである。故に紙幣を以て又貨幣となす限り嚴密なる意味に於ける價值測度は之を否定せられねばならぬ。

次に、假に一步を譲りて、貨幣に價值測度たる職能を認むるとしても、それが紙幣には認められ乍ら帳簿上の請求權には何故否定さる可きか。彼によれば、斯かる帳簿上の請求權は一定の貨幣額を代表せるものにして、⁷⁴⁾之又一般的交換手段たるは事實である。⁷⁵⁾然し乍ら此の場合に於ける一般的受領性は、かかる貨幣請求權が何時にても實行され得ると云ふ保證の存する場合に限らるるものにして、⁷⁶⁾斯かる交換手段に對して財貨を提供する人は、實は財貨と交換に貨幣(貴金屬)を得てゐるのである。故にかかる請求權は一般的交換手段たり得るものなれ共價值の測度たり得ない。⁷³⁾價值の測度は此の場合に於て亦も貴金屬である。

右の主張は、斯かる請求權が一定の貨幣額を代表すると云ふ點、及びその一般的受領性が充分

73) Budge ; a. a. O. SS. 7-8

74) a. a. O. SS. 34 尙 SS. 34-6, S. 38 參照

76) a. a. SS. 37 77) a. a. O. S. 34 參照

75) a. a. O. S. 34.

78) a. a. O. 33 參照

なる保證の存する場合に限られると云ふ點、に於て問題がある。若し其の意味を解して、斯かる請求權の總額に對してそれと等額の金屬準備を要するとならば、正にブドゲの言ふが如くであらう。然し乍ら事實に於ては、一般的交換手段たる帳簿上の請求權（即ち預金通貨）は、決して全額の金屬準備を有するものでない。而もそれにて充分なる保證が與へられ、一般的受領性を得てゐるのである。⁷⁹⁾ 故に此の場合、若し價值測度たる職能を認むるならば、それは金屬でなくして斯かる請求權即ち預金通貨が營み居るものと見る可きである。⁸⁰⁾

要するに、貨幣の價值測度たる職能は、嚴密なる意味に於ては之を認め難く、假令之を認むとも、其の限りに於ては預金通貨も亦之を營み得可きが故に、貴金屬鑄貨及び紙幣のみを貨幣と見て、帳簿上の請求權（預金通貨）を貨幣に非ずとするブドゲの説は、遂にその存立の基礎を覆されるのである。

(二) 一般的交換手段 次に、預金通貨が一般的交換手段たり得ずとして、其の貨幣たる事を否定するものを擧げねばならぬ。而も之らの諸説は總て、一般的交換手段たる爲の必須的要件たる、その一般的受領性及びその讓渡性（移轉性）を疑ふものなるが故に、兩者を分ちて考察する。

即ち先づ、預金通貨を以て銀行預金或は小切手の何れにせよ、今日の實狀よりして、之らは未だ一般的受領性ありと認め得ざるが故に、貨幣となす能はずと主張される。⁸¹⁾

此の問題は、一方に於ては經濟社會の進歩如何により、他方に於ては之を認定する主觀の問題

79) E. Carrell; a. a. O.

80) 尙 Budge は貨幣の兩職能が別個のものによりて行はるゝ事實を見て、斯かる結論に達したるものなれど、(Budge, S. 9) その場合に於ても財貨の價格は先づ一般的交換手段たるものにて測られざる限りは、價值測度たるものによりて表現され得ないのである。即ち、一般的交換手段たる限り必然的に價值測度たる職能を伴ふものである。(Carrell; a. a. O. SS. 610-611)

にも屬するが故に、一概に之を反駁す可きではないであらう。然し乍ら、少くとも世界の主要諸國に於ては、取引の大部分が之に依つて決済されてゐる事實と、⁸²⁾如何なる種類の貨幣に於ても、受領の一般性は一定の限界内に於てのみ實現さるる事實より見て、⁸³⁾右の主張はその效力を殺ぐるものと言はねばならぬ。

次に、預金通貨が讓渡性(又は移轉性)を缺く故に貨幣にあらずとする説は、預金通貨を以て銀行預金と解する⁸⁴⁾場合に多く見受けられるのである。

成程、預金(帳簿上の數字)自體には移轉性又は讓渡性を缺くであらう。然し乍ら、預金の存在は常に小切手振出能力を伴ふものなるが故に、之に依りて容易に移轉せられ得可く、若し同一銀行の顧客間に於てならば之すら要しない。而も、預金の移轉又は讓渡の爲に、小切手を振出す事が非常な手數又は困難を伴ふならば兎も角、それは、所要の金額だけ銀行券又は鑄貨を一々計算して後手交するの煩勞に比すれば、遙かに容易にして簡單なのである。⁸⁵⁾又預金通貨の行ふ所の經濟的作用より見て、必ずしも預金と小切手とを峻別するの必要をも認め難いのである。

尙一般的交換手段たる職能に關聯したるものとしては、預金通貨(特に小切手)が、交換の媒介を以て通常の職分とせざる故に、貨幣にあらずとする説が擧げられる。⁸⁶⁾

然し乍ら、金屬貨幣に於ては、之が鑄潰されて商品となる機會の甚だ多いに拘らず、預金通貨に於ては、それが貨幣たる用途以外に用ひらるる事殆んど無きを見れば、⁸⁷⁾右の主張も又覆されぬ

81) I. Fisher; *ibid.* p. 10, A. Marshall; *Money Credit and Commerce* 1923 pp. 12-3 高垣博士; 貨幣の本質、148頁、牧野博士; 前掲書 126-8頁
82) 牧野博士; 同上 105-112頁 尙田中教授; 貨幣論、銀行論(經濟學全集第七卷) 14頁參照 83) 高田博士; 前掲書、76頁、橋爪教授; 前掲書 190頁
84) 牧野博士; 前掲書、119-122頁、竹島富三郎氏; 貨幣概論、209-210頁
85) 勿論その爲には手形交換帳簿の附替へ等の手數を要するも、それは支拂交換

ばならぬ。

以上の如く、預金通貨に一般的交換手段たる職能を否定するものには種々なる説があれど、何れも眞に傾聴に値するものでない。

(三) 一般的特に合法的支拂手段 預金貨幣否定説に於ても、預金通貨が一般的支拂手段たらざる點を指摘するものなく、只その合法的支拂手段にあらざる事を指摘するものあるのみである。然し乍ら貨幣の法律論的解釋が茲に問題とせられざる可きは、已に前述の如くである。⁸⁸⁾

註、尙預金、小切手の何れが貨幣なりやの問題あれ共本稿に於ては其の點を留保し置く。⁹⁰⁾

四 結 言

以上、私は、預金通貨に貨幣たる事を認むる諸説と之を否定する諸説とを比較吟味し、以て其の何れがより妥當なるかを検討した。而も貨幣の本質は其の職能によりてのみ把握し得可きが故に、主として、貨幣の根本的職能が何であるか、又預金通貨が此の根本的職能を営み得るや否や、の二點に關する讚否兩説の主張を吟味したのである。

先づ預金貨幣肯定説に就て見るに、それらは總て、貨幣の根本的職能を一般的交換手段たる事に求め預金通貨は此の職能を営み得るが故に貨幣なりとするのである。而も現時に於ける交換取引の實狀より見て、預金通貨にも亦他種の貨幣に於けるが如き一般的受領性と讓渡性とを認め得

の社會的擔當者たる、一部特殊の機關に任せられるのみならず、而も多數の交換取引が纏めて一時に決済されるものなる故、個々の取引が一々、銀行券鑄貨等で決済されるよりも、總體的に見て餘程簡易なものと言ひ得るであらう

86) K. Helfferich ; a. a. O. S. 263 SS. 271-2.

87) 橋爪教授 ; 193頁

88) 例へば Knapp (Liefmann ; a. a. O. S. 26より)

89) 尙、預金通貨をば法律上の貨幣請求權と解して之を貨幣に非ずとする説あれ

可きが故に、此の主張は正に正鵠を得たるものと言はねばならぬ。然るに之ら諸説の中には、或は進みて貨幣の本質をば抽象的な觀念となし、或は貨幣に價值測定たる職能を認むる事によつて、右の如き主張の價值を全然失墜せしめてゐるものも存するのである。

翻て預金貨幣否定説を覗ふに、今日尙金屬主義の流れを汲みて、貨幣に價值測定度の必要を認むるものがある。⁹³⁾ 即ち預金通貨は一般的交換手段たり得れ共、價值測定度たり得ざるが故に貨幣に非ずと主張する。然し乍ら貨幣に價值測定たる職能を認むる事自體が誤にして、又假令之を認むるとしても、その限りに於ては一般的交換手段たるものはすべて價值測定度たり得べきである。

更に又、預金通貨に對して、その一般的受領性並びに讓渡性を疑ふものもあれど、斯かる主張の論據又薄弱にして、充分なる反駁理由とはなし難い。

斯くて讚否兩者の諸説を比較するに、假令幾多の缺陷を包藏するとともに、尙前者の説により多くの聽く可きものを見出し得るのである。

ど(牧野博士;前掲書120頁、竹島氏:前掲書 210頁)同じ理由によりて茲には問題とせぬ。 90) 預金小切手を峻別する時には何れの方のみにも欠點がある。預金とすれば、(1)移動性を欠き(2)預金通貨の總額が決定され得ない。又小切手のみとすれば(1)小切手不用の預金振替が説明出來ず(2)所謂不渡小切手も亦貨幣と見ねばならぬ。

91) Liefmann: a. a. O.

92) Beudixen, a. a. O.

93) Budge; a. a. O.